

私のアメリカ生活から

## ソルティ通りのピアノの先生

二十三回生 黒澤 琉美子

(保富)

「ピアノ教授・ロックからバツハまで・クリス」  
この小さな三行広告を見つけたのは、ほんの偶然のことからだった。いつもは見向きもしない薄っぺらいコミュニティの小冊子を、私はその日、何げなく手にとった。

「仔犬あげます」「迷い猫・賞金五十ドル」「ガレージセール」「車売ります」等々、近くに住む人たちの広告がずらりと載っている。その中に、クリス先生の小さな広告があった。

私は丁度、ふたりの娘にピアノを習わせたいと思っていた。小学四年生と三年生の娘たちは、日本でピアノを習っていたので、アメリカでもピアノを弾いても

らいたいとピアノを運んできていた。

我が家のピアノは、長女の三歳の誕生祝いに、音楽好きの兄から贈られた。その時、ピアノを運んできたセールスマンは、かろうじてピアノが通り抜けた狭い団地の玄関に立って、しばらく私と小さな娘を見つめていたが、やおらにこやかに口を開いた。

「奥さん、今にこのお嬢さんが『枯葉』でも弾くようになつてごらん下さい。本当にしみじみピアノのある幸せを感じますよ・・・」

はて、これはどういう意味だろう。多分当時の私たちの暮らしには、ピアノは身分不相応に見え、しかも娘ときたら、昨日まで二歳の赤ちゃんだった人だ。家にピアノがあつて幸せだと感じるには、相当の努力がいりますよ、という意味ではないだろうか。また彼が、シヨパンやベートーベンではなく、『枯葉』という曲を選んだ理由も、何故か謎めいて、お陰で私はこの言葉を決して忘れない。

そして確かに、このピアノはかなりの間、娘ふたりのぜいたくなおもちゃであり、猫の寝台であり、バイエル卒業程度の私のおもちゃでもあった。

娘たちはそれぞれ小学生になると、ピアノを習い始

めた。私たちも団地を出て、小さな家の住人になっていた。一軒おいて隣に、素敵なピアノの先生が住んでおられるという幸運もあった。教材は、三十年近く前に私が習ったのとほぼ同じであり、練習曲には『枯葉』は当然ながら無かった。

カタコト英語しか話せない私にとって、アメリカ人に電話をかけるのは、いつも勇気のいることだ。手近の紙に、自分の言いたいことの英文を書いてみる。それから、ごくりと唾をのみこんで、ダイヤルを回す。

「ハ・ロ・オウ」

陽気な声が返ってきた。クリス先生は、日本から来たばかりで子どもたちは英語が話せないことを言うと一緒にためらったようだったが、

「相手が音楽だもの、やってみましょう」と、快く引き受けて下さった。

それから週一回、クリス先生の住むソルティ通りに、母娘三人で通うことになった。

クリス先生は小柄で、整った顔立ちに、金髪、年齢は三十代半ばくらいだろうか。明るく澄んだ青い眼は、いつも笑っているように見える。どういふ訳か、少々

ご機嫌の良くない時でも、眼だけは笑っているように見えるのだ。性格はいたって明るく、気取らない。ピアノを弾くスタイルも、きゃしゃなからだに似合わず、男性的だ。

この先生は、ピアノの教科書のようなもの、例えばバイエルやソナチネのようなものは使わない。指の練習の本は使うが、あとは短い曲を、子どもたちの手の大きさや技術に合わせて先生が編曲し、その楽譜をコピーして使う。オリジナル曲を使うときも、先生の本を借りてコピーする。一曲ごとに表紙をつけて大きくタイトルを書き、時には絵も描き、それなりに楽しい作業ではあったけれど、すべてがコピーでは少々重みに欠ける感じではあった。

曲を決めるときは、先生が教曲用意してある中から生徒が選ぶ。先生は、自分で弾いてみせては、「これ好き？」と聞かれるが、娘たちはどれを選べばよいか分からず、いつも戸惑ってしまう。

考えてみれば、日本では何事によらず与えられたものを抵抗なく（又は、少々抵抗があっても）受け入れていくことが多い。そしてそれに慣れてしまうと、こんな楽なことはないのだ。自分で選べる自由の陰には、

手間と、選んだことへの責任がついてまわる。私たちはアメリカに来て、ほんの小さなことでも自分の意志を持たねばならないことに、改めて驚きを感じることに少なからずあったが、この曲選びもそのひとつだった。

クリス先生は、全然英語の分らない娘たちに、根気よく語りかけ、弾いてみせては教える。時折「ママ、ヘルプ！」と声がかかると、後で本など読んでいる私が、のっそりと顔を上げる。娘たちより単語の数が多い分だけ役に立つというものだが、それとてあまりあてにはならない。時折早口で冗談などを言われると、もう絶対に分らない。それでも「音楽だからやってみましょう」と言って下さったことに助けられて、何とか続けることが出来た。娘たちも少しづつ言葉も覚えていった。

生徒のピアノの発表会は、半年に一度、先生の家である。リビングルームの家具を移動させて、折りたたみ椅子を四、五十脚並べ、正面横向きにピアノ、隣りにベースとドラムが並ぶ。小さい子どものロックミュージックは、少々ピアノが下手でも、ベースとドラムの伴奏がつくと、大変迫力があり楽しいものだ。さす

あの日のセールスマンは、今はどうしているだろう。あの三歳になったばかりの娘が、アメリカでクリス先生に出逢い、本当に『枯葉』を弾くようになるうとは、あの頃、誰が予想できたろう。

クリス先生の家族は、十一歳の長男キット君の下に小さな弟ふたりと、不動産会社勤務のご主人の五大家族で、一見平凡な平和な家庭に見えた。ピアノばかりか絵の才能もある先生は、時折ご主人の会社の宣伝用のTシャツに絵を描く仕事を引き受けていた。若くハンスサムなご主人は、よく庭でトントン大工仕事をしていたりして、私たちとも顔見知りになったが、いつの頃からか、ご主人の車も、ご主人もぱったり見えなくなった。

そして先生は、ピアノ教授のほかに、プラスチック食器の販売も始め、ピアノの月謝も少し値上げをした。何かがあったのだと感じられたが、言葉が不自由なこともあり、つっこんだことは聞けなかった。私たちは、毎週毎週ソルティ通りの先生の家にただ夢のように着陸していた。

ある夏の日、先生が突然言った。

がアメリカである。クラシックの場合は、クリス先生のバイオリンの伴奏がつく。

さて娘たちも習い始めて一年余りの月日がたち、二度目の発表会の練習が始まることになった。

ある日、先生は、

「オータム・リーブスという曲を知っている？」と、長女に聞いた。娘は首を横に振っている。後で聞いていた私は、はっとした。オータム・リーブスとは、『枯葉』のことではないだろうか。

「オータム・リーブスって、シャンソンでしょう？」私は思わず口をはさむ。

「シャンソンで何かしら？」と先生。

「フランスの歌でしよう？」

「あら、知らなかったわ」

クリス先生は、にこっと笑うとピアノを弾き始めた。まさにあのシャンソンの『枯葉』であった。先生の編曲で、なかなか優雅である。ロマンチストの長女は、大いに気に入って、それから連日私は『枯葉』を聴くこととなった。

私は、日当たりの悪い団地の2DKに、黒々と光る大きなピアノが運びこまれた日のことを思い出した。

「私、オハイオに行くことにしました。ここは物価が高いから」

「えっ、お引越ですか？」

「ええ、オハイオには母も弟もいるから・・・」先生は言いよんだ。先生は小さい頃、お母さんからピアノを習ったといつか聞いたことがある。時々、オハイオに帰っては、小さなトランクにぎっしり、お母さんの古い楽譜を持ち帰るのだと言って、古い楽譜を沢山見せて貰ったこともあった。

「ただこの家がなかなか売れなくて・・・」

先生の青い眼が一瞬くもった。湖のような瞳に涙がたまった。それでも先生の眼は笑っているように見える。泣き笑いの先生に私は何と言えいいのか分からない。

「娘たちが淋しがります」

「私もよ」

先生は今度はすっかり気をとりなおして笑った。

「ピアノの先生を紹介してあげますからね。よく練習するのよ」

先生は、新しい先生の電話番号を書いてくれて、私たちは長い間お世話になったお礼を言った。さて、も

う話すことがなくなった。

「お別れのときに言う、何か特別な言葉がありますか？」私の質問に、先生は、

「ただ、グッバイよ」と笑った。皆で笑いながら、「グッバイ」を言い合い、外に出た。

車に乗って振り返ると、先生はぼつんと広いガラス窓の内側に立って、ぼんやり私たちを見ていた。

後日談…その後紹介された先生は、スウェーデン人の男性で、ポーマン先生と言った。クリスマス先生の発表会でベースを弾いていた人物である。彼はプロのピアノ弾きで、ピアノを弾くことは他人を楽しませることだと子どもたちにも教え、レッスン後には、それこそロックからバツハマまで様々な曲を弾いて、私たちを楽しませてくれた。しかしある日強盗に襲われて十三箇所も刺され、長期入院となった。その間に私たちの帰国が急に決まり、そのままのお別れとなってしまった。

一九七七〜八一年にかけて夫の海外赴任でロサンゼルス郊外のトーランス市に住んでいた頃の出来事である。

『枯葉』の手書き楽譜と表紙

